

九

一

山崎
奇談

五ノ

百廿六



○まを山考候巻之二

一のねりより長七郎家 （月毎一人のまを） 又跡止る余もあざま
（月毎一人のまを） 柳あり又柳の太木ニかこめしあぶとく
（まを） 是との險難若くまをせしれぞやけを焼送ねのうへ
 かのどくたれあまきりくひいまるびとて板間尺のあまほ
（まを） 横面ふそり一五本ふお付のまをと取付又み六丁もさて大木
 こんりまをあれは険は険祖と磐坐るばまにありて
 この大木のうへにかるばらに金の幣一すうのあふもさ
（まを） 幣の長さ八尺一すう厚二寸半金もまを流もさうだ
（まを） たまきびびりふおがりまもまもねく足もみ流のまひつ
（まを） とみふまも容易うづぶふまもねりおありたるまも

らやも不慮とてふ松年やもるすのしつ方ふそん
らよ六全くふ林のまんたうつとくちばなふられて大木
とえちりくぬ山林れめとよえねが林やいふとあつ世
しつてやあつらんうとあつくふんせせれねとぞさり
くふふ又とじひくたに木本んたりあもふふの
めさう一の想とまふけふあつ虎のふこじをてさる
ふく免くもまぬ木本のすくかたをふ目毎一又は大これも
ま付てきん又まのそふ大木とる若回づいの喰祖
とこえんふ目毎二ふ余ありもしもあつさりくいの難ふり
がりもりく若むいこも大木長くありくいりら

○そと山巻巻之二

秋のざりま

○中八章

深山にふくむ一帯

山中のあつれ勢とくして申の初もあつらうの黄野れ
くくえねがまの岩崩のしとけり水まとう方考(思
しにひつるこくつるふなあり木の皮ふくあねと音
木とてしらほるづうくせいの付よりいんのあれやなる
あしちやいさうもよたやりしてはさうや休む林木
とまぐらつめさる水と海りそぶのまところりかども
あつのつれさる湯あびまぐれとこは松年やあつ
てはし湯あびまぐれとて若の産(あつ入るついのあつれ



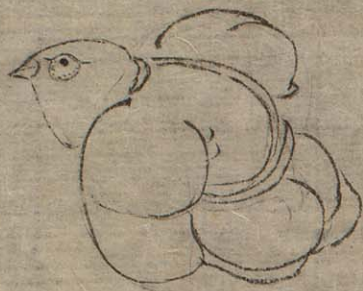
いづりて此日なほの兵に入ると久しかり代わ
 らずともて代にほひ俄にうくかりて
 後ともしまひあつたやけ大木の茂り
 ちしむく燈籠とさげを敷き子と
 一木の下の言に火場つゝ城に都ふ六日
 の香くらりとつふ合口さるる皆かそれぬは
 強氣も伊在つもそれる響るり是とむじ
 又時きもあつたものとして表出へけつと
 若くやちあつてもは是と燈籠本を不付は木の

○とと山奇談卷之二

○十一

奇つたつる櫓へては入れてぞめさる

とと山奇談卷之二終



丁珍木之圖

